

全国頸髄損傷者連絡会の紹介

You are not alone... ひとりじゃないよ!

□頸髄損傷者とは

交通事故、スポーツ事故、労働災害、病気などによって頸髄を損傷し、後遺障害の残った者を言います。後遺障害として、四肢体幹の機能障害、知覚麻痺、呼吸器機能の低下、さらに体温調節機能障害、排泄機能障害が起こります。

□私たちの活動

頸髄損傷者への情報提供、親睦交流、行政交渉などを行い、頸髄損傷者の抱える問題を解決するために活動をしています。

頸髄損傷者となり、重い障害に悩み苦しむ、人生をあきらめていませんか。頸髄損傷者の問題は、多くの仲間が過去に体験したものかもしれません。一人で悩まず、私たちに相談してみませんか。同じ障害を持つ者として、きっとお役にたてることがあると確信しています。私たちは自らの体験を通して得た情報や知恵を共有して活動を続け、今もどこかで苦悩している頸髄損傷者の力になりたいと思っています。

□歴史・組織

1973年4月、当初30人であった会員も現在800名、10支部2連絡所を設立しています。活動状況は、北海道、福島、栃木、東京、神奈川、静岡、愛知、岐阜、京都、大阪、兵庫、愛媛（四国連合）の各支部が連携し、全国レベル、地域レベルの問題に対応しています。

(入会案内 頸損のしおりより抜粋)

日本リハビリテーション工学協会の紹介

日本リハビリテーション工学協会は、生活を行う上で障害を有する人々に対し、その生活を豊かに実現するための工学的支援技術を発展・普及させるとともに、この技術を通じて学術・文化・産業の振興に寄与することを目的とし、この目的に賛同する個人および団体によって構成されています。

◎ 協会事業

◆「リハビリ工学カンファレンス」の開催

障害のある方のリハビリテーションを支援する機器や技術について、リハビリテーションに関係するさまざまな分野の参加者が互いに理解できる言葉で納得できるまで討論することを目的として、毎年1回開催しています。

◆福祉機器コンテストの実施

障害者、高齢者のために新しく開発された福祉機器を発掘し、優れた機器を表彰するとともに、学生を対象とした啓蒙・普及を通じてこの領域に関する認識・参画を促進することを目的とし、年1回開催しています。

2008年度には、20回目の開催となりました。

◆「リハビリテーション・エンジニアリング」発行

協会誌「リハビリテーション・エンジニアリング」を年4回発行しています。

そのほか、障害者のリハビリテーションに役立つ工学・技術に関する図書を発行しています。

(入会案内より抜粋)

僕らのすっげえことやってみたプロジェクト報告



米田進一（兵庫頸髄損傷者連絡会）

プロフィール

兵庫県生まれ。2005年5月、大型トラックを運転中に交通事故によりC1損傷。完全四肢麻痺で人工呼吸器を24時間使用し、昼間はマウスピース、夜間は鼻マスクを使用。

受傷1年9ヶ月(2007年2月)の時、関西労災病院の主治医の紹介で頸損連絡会のメンバーと出会い会員となる。その後2007年6月に市民公開講座のパネラー、10月に初外泊、12月に学生ボランティアと大分県へ旅行。

2008年5月に頸損連の大阪全国大会に出席、7月に鳥取県訪問、10月に学生ボランティアだけで2泊3日の宿泊訓練を体験、11月に四国中央市を訪問し活動範囲を広げている。

人工呼吸器使用者の存在をアピールしていくために外に出て行きたい。今を生きているからこそ楽しむ人生を諦めたくはありません。未だに外出すら出来ない人も多くいます。そんな人たちを前向きに出来る活動をこれからやりたいと思います。全国の人工呼吸器使用者の皆さま、外に出ることをあきらめないで!

「行ってみたプロジェクト」

まず、現状を知ってもらうために

- 現在使っているサービス（曜日別）、受給時間 280 時間
月曜日 訪問看護、訪問リハビリ、往診（膀胱路洗浄、交換など）
火曜日 訪問入浴、訪問リハビリ
水曜日 訪問看護、（※月曜日休日の時だけ訪問リハビリ変更）
木曜日 特養施設デイサービス、月1回、労災病院診察
金曜日 午前外出、訪問看護、訪問リハビリ、月に一度往診（内科）
土曜日 訪問清拭、外出など（ヘルパー、ボランティア）
日曜日 休日、外出など（ヘルパー、ボランティア）

1ヶ月で280時間、重度(身体介護含む)訪問介護を使用。月に一度、関西労災病院へ定期診察に行く。リハビリは約1時間半、呼吸訓練で片言ぐらいの単語を話すまでになった。もっと訓練をして呼吸器を必要な時だけ使用するまでになりたい。

● 困っていること、してほしい支援（願望）

- ①人工呼吸器使用者ということで、現状では受け入れてもらえる施設などが少ない。電話だけではなく、実際に会ってから、検討してほしい。そうしてもらえれば、未だに外出できていない当事者も、もっと前向きになれる。介助の大変さは当然だが、一度といわず、数回に分けて介護体験し、時間を掛けて検討してほしい。
- ②公共交通機関を利用する際に、エレベーターの広さが様々なので、その都度レッグサポートの取り外しをしなければ乗れないものが数多くある。その際に足にアザができることもある。エレベーターの設置場所が遠く、介助者にも負担が掛かる。電車内の車いすスペースは狭い。客室に入れずデッキに居座ったこともある。車いすの大きさは様々なので、余裕のあるスペースを確保してほしい。
- ③市には、数日でも介助者を連れて外泊できる制度を希望する。家族も高齢になってきており、介助者と旅行したい。地域差はあるが制度上、介助者の外泊ができないことが不安である。

● 今後の目標

どんな障害者でも気軽に利用できる福祉施設などで活動したい。当たり前のように生活ができて、あと、いつになるかわからないが、電動車いすに乗りたい。出来ることなら、自分で操作をして社会参加を増やしていきたい。そして海外旅行を実現させたい。自立生活を目標に段取りしている。呼吸器を使用してどこまでやれるかはわからないが、経験を積みながら頑張りたい。

● 呼吸器使用者でも何でも出来る

自分が体験してきたことだが、受傷してからの自分は外出することさえ苦痛だった。免疫力の低下により紫外線に弱く、体力のなさに苛立ちを隠せずにいた。でも頸損者の皆さんと出会い、少しずつ外